事務局 amateur スタッフによる **フォロー・アップ メモ・ランダム**

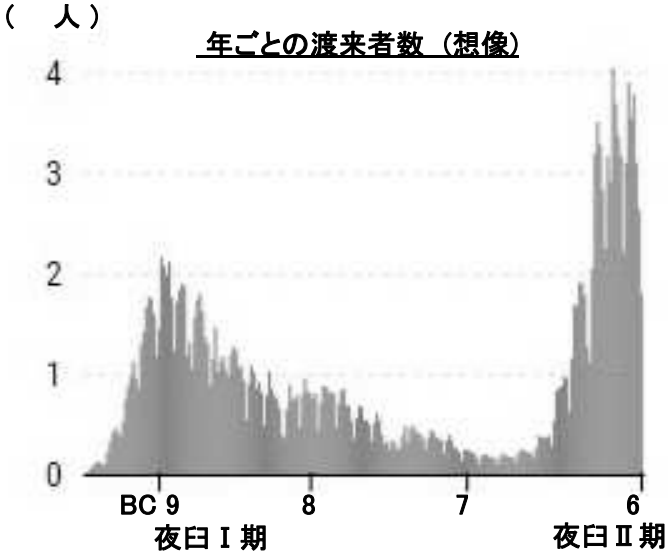
“弥生時代の始まり”にて

2009年のやよい塾九州研修ツアーでは板付遺跡を訪問し、弥生館に展示されているジオラマ(右下の写真)を見学しました。この遺跡は福岡平野のほぼ中央にあり、県が管理する御笠川の下流域の河口から約5kmのところにあります。当時の御笠川がどこを流れていたか分かりませんが、現在は遺跡から数百m東を流れ、遺跡は御笠川に注ぐ二本の支流に挟まれています。写真の右側の一番太い川は、どちらかの支流でしょうか。中央部の居住区との間にあるのは、人工的に作られた用水路だと思われます。いくつかの取水口が設けられ、水田に水が供給されているようです。余った水が川に排水されるように水路もあり、完成された灌漑水耕の形を見てとることができます。

板付遺跡弥生館のジオラマ

レジメにある“『最古の農村』の遺跡分布”をみると中央の那珂川や西部の室見川には、上流域に縄文晩期の遺跡が分布し、中流域に弥生早期・前期初頭の遺跡が分布しているのが分かります。昨年登壇された宮本先生の“農耕伝播の二重構造モデル”では、板付遺跡に伝播された温帯ジャポニカの前に、南江流域から熱帯ジャポニカが唐津平野に伝播されたと言うお話しでした。

下のグラフは“農耕伝播の二重構造モデル”を想定して、夜臼Ⅰ期と夜臼Ⅱ期の年ごとの渡来者数をイメージしたものです。絶対者数は分かりませんので、縦軸単位の( )の中は十か百か、或いはそれ以外かも分かりません。渡来集団は数人から数十人、年に何回か、渡来がない年もあるでしょう。でも出発地は何ヶ所もあるだろうし、数百年もかけてのことだからそれなりの人数になるはずです。



半島に農耕技術が伝わり水耕稲作を始めた当時の人たちですが、熱帯原産のイネにとってその北限に近い半島では、十分な収量が得られず存亡の危機に瀕したかもしれません。なんとか生き延びたいとの一念で、暖かくてコメの収量が多いと噂される、(南)東海上の蓬莱を目指して旅立ったのかもしれません。大半の渡来者は着の身着のままに近かったでしょうが、一部の人が、元居た故郷で栽培していたイネの種籾や、耕作農具を携えて命がけの旅をしたのでしょう。大多数の手ぶらで渡来した人たちも故郷でしていた耕作方法を身に着けています。先に渡海して、昔の技術で営農している先達者を手伝って、最新技術を伝えることで収穫高をあげることに貢献したと思います。

板付遺跡のある平野中央部は穏やかな気候のもとでは、大量の収穫をもたらす好地ですが、常にそうではありません。堤防もない傾斜の緩やかな川は、悪天候に見舞われて水かさが増すと流路が定まらなくなり、洪水が発生すれば、作付け地が泥や流木で台無しにされてしまいます。ハザードマップによれば、遺跡がある辺りは水深が1mを超えることもあるようです。リスクの高い立地であることは、先行して渡来した人たちも知っていたのでしょう。彼らが選んだのは、菜畑遺跡のような高くない山あいの谷すじから近くの、少しだけ開けた平地です。ここなら流路も安定し、土地が広くないので少人数での開拓も可能です。山に近いので狩猟・採集にも便利だったと思います。何世代かでノウハウを蓄積し、耕作方法を改良しながら人口も増やしていったのではないでしょうか。

時が降って板付遺跡が開墾される時代には、米という安定食糧で体力(免疫力)が向上したことと、断続的に渡来してきた人たちが加わったこと、などによって就労人口が増えたので、大きく開かれた土地への進出が可能になったのだと思います。

ジオラマの風景は、遺跡の最終形だったと思いますが、彼らが最初に水田作りを始めたときは、樹木や下草が生い茂った荒地か、或いはぬかるんだ湿地だったのではないでしょうか。田んぼ作りに専念するには、上流の集落に残った仲間からの食糧補給が必要です。食糧や重い道具を持って陸上を移動するのは大変ですが、川を使えば簡単です。上流から下流への一方通行なら、筏を御する船頭が一人いれば十分だし、柵(しがらみ)のような施設があれば、無人でもいいかも知れません。現代にも通ずる川筋沿いの生活圏はこの当時から続く習慣かも知れません。

※ 古代史（弥生時代～飛鳥時代）に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論 大募集（体裁は自由ですが、文書でお願いします）